聞名仏教

第 194 号　　毎月発行
（発行日）2024 年 11 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
ｱﾄﾞﾚｽ nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 **聞法会ご案内** 》

○〈**同朋の会**〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈**念仏座談会**〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「**聞名の会**」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈**真宗入門講座**〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

アメリカは貧乏国　佐々木蓮麿

西田天香氏は、ずっと以前にアメリカへ講演行脚に行かれたことがありました。その後、また全国を行脚されて九州にも来られました。一日、私の町で講演をしてもらったのですが、その講演の中で、「私がアメリカに行って、生活の話をして歩きましたところ、アメリカ人も非常に共鳴してくれ、私が帰国するときには別れを惜しみ、無一物の生活に同情して金を贈るように申し出られたのでありましたが、私はアメリカのような貧乏国から金を貰う必要はないと言って断わって帰りました」と言われたのであります。この話を聞いていた聴衆は、みんな、その話の意外なのに驚き、氏の講演が終わると、数人の聴衆が氏の控え間に詰め寄せて言うには「先生のお話を聞くと、アメリカは貧乏国だとおっしゃったが、それはどうも納得ができません。アメリカが世界一の金持ち国であるということではありませんか、それを先生はどういう意味でアメリカを貧乏国と言われたのですか？」と詰問しました。すると天香氏の言われるには、アメリカが沢山の財を持っていることは分かりきっているが、どれほど持っても、まだ足らぬ、まだ足らぬと言っているから貧乏国です。私は無一物の生活をしておりながら何らの不足を感ぜず、いつも満足の生活をしておりますから気持は長者です。そこで貧乏国のアメリカから金を貰う必要はないと思って断わったわけです」と答えられたのをおぼえております。ちょっと聞くと天香さんのホラ話のようにもとれますが、また一つの真理を言っておられるようにも思います。

西田天香氏は、つねに「無一物中無尽蔵有花有月有楼台」（無一物中無尽蔵、花あり月あり楼台（ろうだい）あり）ということをモットーとして生活しておられる方です。こうした理屈は現代のような物質本位、金銭万能の思想が世を風びしている時代には、ちょっと受け容（い）れられない考え方ですが、究極の安住を求めるならばどうしても、無一物無尽蔵の真理に立脚せねばならぬのではないでしょうか。

近来、いろんな実利主義の宗教が世にもてはやされるようですが、それは現代人の考えにマッチするからでしょう。しかし実利主義というものは当然、行き詰まるべきはずのものです。それをもって宗教の利益と考えることは、矛盾も甚だしいものと言わねばなりません。

古来、名を千載にのこした宗教家にして実利主義に走った人が幾人あるでしょうか。すべては清貧に甘んじた人ばかりです。それらの人達は目に見えぬ永遠の富を得ておられたのであります。

宗教の世界は無一物無尽蔵です。西田天香氏はまた言われた「金がなくては布教活動ができぬという考えは不純だ、真の布教は無一物の中から叫ばれるものでなくてはならぬ」と、これもまた味うべき名言だと思います。（了）

（『安心清話』、昭和四二年刊）

（念佛寺出版物）

一。『近代教学と伝統宗学の接点』
二。『真宗の念佛と信心』
三。『真宗教学の諸問題』
四。『佛に遇うまで』
五。『第十八願を読む』
六。『真宗の根本構造』
七。『木村無相　お念仏の便り』
八。『松並松五郎念佛語録』
九。『佐々木蓮麿法味寸言』

清沢満之先生に学ぶ⑲

前回（先月号）に続いて清沢満之先生の『我が信念』の中の文章を引き続き引用いたします。

私の信念は大略此の如きものである。第一の点より云へば、如来は私に対する無限の慈悲である。第二の点より云へば、如来は私に対する無限の智慧である。第三の点より云へば、如来は私に対する無限の能力である。斯くして私の信念は、無限の慈悲と無限の智慧と無限の能力との実在を信ずるのである。無限の慈悲なるが故に、信念確定の其の時より、如来は私をして直ちに平穏と安楽とを得せしめたまう。

＊　＊

浄土真宗のお説教を聞きますと、必ず阿弥陀仏とか阿弥陀如来とかいう言葉を聞きます。真宗では阿弥陀仏を御本尊としてお内仏（お仏壇）の一番上に、阿弥陀仏の絵像なり名号なりをお掛けします。若い頃からいろいろな真宗の本とかお説教を聞いていますと、当然「阿弥陀仏」という言葉をよく聞きます。そこで、「阿弥陀仏とは何か」という説明を聞くと「阿弥陀仏とは「大悲の親様」であるとか「救ってくださる大慈悲のおはたらき」とか聞かされますし、学問的になりますと「法性法身」とか「方便法身」とか、あるいは「真如」とかいわれます。

その中で一番分かりやすい言葉は「光明無量・寿命無量」というお聖教の言葉だと思います。そして真宗の教義は光明無量を中心に説かれます。親鸞聖人は「阿弥陀仏は十二光のお徳がある」と仰せられ、『仏説無量寿経』には、

「無量寿仏を、無量光仏・無辺光仏・無碍光仏・無対光仏・焔王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す」

と、十二光が説かれています。

伝統されてきた真宗の教義では十二光の中で無碍光のはたらきが重要といわれています。阿弥陀仏のはたらきである慈悲なり智慧なりは、「無碍光」の慈悲、「智慧光」の智慧という風に光明で示されています。こうした光明のはたらきは衆生救済のはたらきとして、『無量寿経』には法蔵菩薩が四十八願成就して「阿弥陀仏の本願力」として現在もはたらき続けていると詳しく説かれています。

ところで、「阿弥陀仏は大悲の光明でもって衆生を救うてくださる」というように光明を中心に語られる法話を何度も聴かせていきますが、しかし私は若い頃そのように聞いてもどうも漠然としていて、リアルな感じが長い間しませんでした。あるいはもっと難しく「阿弥陀仏は法性法身から現れた方便法身の仏様です」と聞かされたりもしますが、その法性法身というものが何であるのか、それがどうもわかりませんでした。真宗学者も仏教学者も阿弥陀仏の本質を語る場合、「真如」とか「法身」とか「空」などの言葉をよく使いますが、いったいそれが何なのかよく分かりませんでした。これは私だけでなく、勝れた禅僧であった内山興正師も若い頃、そのように感じていたそうです。

「法性法身から現れてくださって衆生を救いたもう方便法身の仏様が阿弥陀仏ですよ」というのが定型句のように説明されていますが、その「法性法身とは何か」ということ、それが私には問題でした。

ところで親鸞聖人のご門弟で、関東にいた信心の厚い慶信が、親鸞聖人に宛てた手紙の中で、

「寿命無量を体として、光明無量の徳用はなれたまわざれば、如来の心光に一味なり」

と書いています。ですので、日頃慶信は「寿命無量を本体として、光明無量のはたらきをなさる仏、それが阿弥陀仏である」と聖人から教えられていたのでしょう。ですので寿命無量が本体で、光明無量が衆生を救うはたらき（徳用）であるといわれ、この二つが阿弥陀仏の本質だと知らされます。

そして光明のはたらきは智慧と慈悲のはたらきであるというのが定説です。ですので親鸞聖人は『浄土文類聚鈔』というお聖教に、

「寿命延長、よく量ることなし。慈悲深遠にして虚空のごとし、智慧円満にして巨海のごとし」

と仰っています。この三つの本質をもっているはたらきが阿弥陀仏だといわれるのです。

さてこの三つの本質に対応して、西洋哲学をも学びしかも体験的に真宗を了解した清沢先生は『我が信念』に如来を「無限の慈悲と無限の智慧と無限の能力」と表しました。ここで、親鸞

聖人の先ほどのお言葉と比べますと、全く同じなのは「慈悲と智慧」です。「**慈悲深遠にして虚空のごとし**」は慈悲のはたらき、「**智慧円満にして巨海のごとし**」は智慧のはたらき、その無限なはたらきを先生は「無限の慈悲と無限の智慧」といわれます。

そして注目すべき言葉は「**寿命延長、よく量ることなし**」という言葉です。「寿命延長、よく量ることなし」は寿命はどこどこまでも広がっていて時間的空間的に限りがないということで、寿命無量のことです。先生はそれを「無限の能力」と表されたのでした。更に先生はは無限の能力のことを「絶対無限の妙用」とか「一大不可思議力」ともいわれます。

そういうことで無限の能力は寿命無量ですから、それを「体」としてということは本体としてということです。これを本体すなわち根源として、「智慧と慈悲」を「用」とするで、寿命の中にあるはたらき（用）が智慧と慈悲であるといわれます。これが阿弥陀仏の本質になります。

そこで無限の能力とは一体何かというと、心の無限なはたらき（精神のエネルギー）も意味しますが、物質的にエネルギーとしても当然無限なはたらきと了解でき、広大な物質的な領域を包括している力といえます。そうすると「無限の能力」とは精神的・物質的な無限のはたらきということで、宇宙的な生命力、大いなる生命のはたらきといえましょう。そうしますと「寿命無量」は万物、万人の存在をして存在たらしめている生命のはたらきであると受け取れます。

こうして他の様々な物もそうですが、身近には私たち人間存在を成立せしめている力を無限の能力すなわち寿命無量（阿弥陀仏）のはたらきであると先生は見ておられるのです。ですので法性法身とか真如といっても、その実際的な意味ははかりないいいのちのはたらきであるとうかがえますので、法性とか真如というと、心の無限なはたらきにしか聞こえないのです。

そこで阿弥陀仏は私の存在と密接に関わっているといえます。清沢先生は三六歳の時に結核という難病を抱え、人間関係の大きな束縛のなかで、「自己とは何ぞや」といのちがけで問い、ついに、

「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり」

と自覚的に答えを出したのです。そしてこの「絶対無限の妙用」を阿弥陀仏といわれます。

このような自覚と先生のこうした言葉は、浄土真宗の歴史の教義をさらに展開する大事な意味をもっています。先生の言葉は親鸞聖人の教えを更に一歩展開した言葉であり、浄土真宗の歴史の中で大きな足跡を残しました。

伝統の教学は、簡単にもうしますと、――迷える苦悩の衆生がいて、その衆生を救うて、死後に浄土に生まれさせて仏にし、迷える世界に還って無窮に衆生を救済していく菩薩にならしめようという、そういう阿弥陀仏の本願力がはたらいている。その本願力のはたらきの形が南無阿弥陀仏の名号であり、この本願の名号を信受するときに浄土に生まれることがこの世で定まる――という教えでした。

しかし近代に入り、「人間そのものは何か」、つまり自己存在は何であり、何によって成立しているのか、そして人の苦しみがどこから起こり、その解決はどこにあるのかという問題が真剣に問われてきました。「自己存在」そのものを問い、自己存在を基点として、人間存在の問題を解決していくという近現代のアプローチの仕方で宗教が問われてきました。

こうした課題の中で真宗教学を理解する、それが清沢先生が取り組んだお仕事でした。そしてそれに応えていかれたのでした。私という人間が「今ここに存在する」、その成立根拠が阿弥陀仏であるということです。阿弥陀仏は、私がそれを信じようと信じまいと、分かろうと分かるまいと、善をなそうと悪をなしてしまおうと、何を考え、何を選ぶかに先立って、ちゃんとその人そのものを抱いている、支えている、生かしている、人と一つとなって結び付いている。そういう存在が阿弥陀仏であるということです。ただそのことを「知らない」、そこに大きな問題があるのです。それが迷いということで、迷いによって苦しみが惹起（じゃっき）してくるのであり、さまざまな悪が跋扈（ばっこ）してくるのであります。ですから阿弥陀仏が私を、私がどうこうする前に、有難いことに、ちゃんと在らしめてくださっており、摂め取ってくださっていることを「知る」一つが極めて大事です。真宗の信心というのもそれを知らせてくださ

る智慧であります。それが真実の利益なのです。『歎異抄』第一章の初めに

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」

とあって、真宗の利益とは「摂取不捨の利益」であり、その利益とは阿弥陀仏に摂め取られていることを「知らせていただく」という利益です。それが信心の智慧といわれる内容です。

最後に付け加えますと、寿命無量の無限の能力は、物質の領域を成り立たしめているはたらきとしておのずから、物質のはたらきを研究し、応用する自然科学、そして人間活動の生産、消費・分配の在り方が関わる経済的領域の基盤になっています。浄土真宗は人間生活における全体的な世界観であり人生観ですから、そこにまでも視野に入れることが求められています。寿命無量が人間世界の自然科学や経済法則や経済政策にかかわってきますから、世界の政治・政策にも目を配る必要が真宗の教えから出てくるのです。（了）

信心夜話

聞法していると、教えをいくら聞いても、信心が起こらないとか疑いが晴れないとか、いつまでもハッキリしないとか、こういう場面に必ずといってよいほどぶつかります。ぶつからないとすれば、よほど素直に本願を受け入れているか、それとも真剣に聞法して信心をいただきたいと思わないかだと思います。聴聞してなんとか分かりたい、信心を得たいと、自分自身の一番大事な問題として聞法に励むと、多くの場合、「いつまでも信じられない」「疑いが晴れない」「わからない」などという壁にぶつかります。そうすると「いつまで聞いても分からない、情けない」という自分の状態が大変気になります。「どうして自分はこんなにダメなんだろうか」とか、「自分はもう一生わからないのではないか」というような思いが募ってきます。これは「機なげき」と古来からいわれている姿で、なさけない機である自分の心の方ばかりに目がいってしまっているのです。教えを聞いても、教えを受け取れない我が心ばかりが気になるのです。この「機なげき」の状態になると、自分の状態ばかりに目が行き、本願を聞いても、法の方に心がまっすぐに向かわず、教えを素直に聞かないようになりますが、法を軽んじているのです。

耳では法を聞いているそうではなくて自分の心が信じようが信じまいが、疑いがあろうがなかろうが、はっきりしようがすまいが、もう自分の心や状態は見限って、お聞かせくださる本願のお心、仏心を素直に「聞く」ことが大事です。機の方はそのままにして、この機に喚びかけられている「助からぬ汝を引き受ける」との大悲の仰せを、聞いて聞いて聞き抜く、称えて称えて称えぬく、という聞法が大事だと思います。機の方へこだわり、機の方が気になるのは機の方にまだ救いに役に立つものがあると思っているからです。（了）

今年2月6日（午後7時）の「聞名の会」は休ませていただきます。ご注意下さい。

住職雑感

八十の坂を越えると、何か用事がないと外に出なくなった。先日、フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』が大阪の美術館に来るというので、行ってみようと思っていたが、内心はそれほど行きたいとは思っていなかったとみえていつの間にか展示期間が過ぎて行かなかった。近くに県立芸術文化センターがあり、佐渡裕氏も関わっているコンサートホールがあるが、堀米ユズ子のバッハの無伴奏全曲を数年前に聴いたのが最後、行っていない。名所や旧跡も、別に行く必要がなければ、たまたま近くまできたついでにしか訪れない。関心がないのではないが、どこに出かけなくても、家に居てちっとも退屈しないからであろうか。西宮市の甲子園界隈に住んでいるので、よく「阪神ファンですか」などと訊かれるが一度もプロ野球は見たことがない。

≪念佛寺報恩講≫

十二月二十二日（火）午後二時始

講師　大阪市　藤井善隆先生

＊なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。ご自由にお参り